

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2010 ～ 2012
 課題番号： 22520820
 研究課題名（和文） マレー人との共棲関係から見たボルネオ・ダヤクの山地民意識の社会人類学的研究
 研究課題名（英文） Social Anthropological Study on the Ethnic Identity of the Borneo Dayak through Symbiotic Relation with the Malay
 研究代表者
 石井 眞夫（ISHII MASAO）
 三重大学・人文学部・教授
 研究者番号： 20136576

研究成果の概要（和文）：

本研究ではボルネオ山地民ダヤクを対象として、植民地時代以降の都市化と近代化の進行の中で、その民族意識がどのように変化し、現代ボルネオ社会の中でどのような意義を持つかを探ってきた。ボルネオではダヤクはマレーに対比され、古くから使われる民族概念だが、国民国家形成後の近代化の中で、むしろダヤク意識は高まりボルネオ地方政治の中で重要な役割を持つ。民族協会活動やキリスト教会活動など、民族意識を高める多様な活動が地域社会の固有性を形成している。

研究成果の概要（英文）：

The focus of this study is to analyze the ethnic consciousness the mountain dwelling people called “Dayak” of Borneo, in the changing modern society. In Borneo the word “Dayak” was used from old days, contrasted to the “Malay” who live in the plain area subsisted on the wet rice cultivation. It was expected that the formation of modern nation states since the colonial era might weaken this sharp contrast between these two styles of livelihoods through modernization and urbanization. But the intensive field study of revealed that the ethnicity of the Dayak people is strengthened in the urban area, and the activities of the various ethnic societies and the Christian churches influence the ethnic identity of the Dayak people in the urban settings of Borneo.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：社会人類学、民族意識、都市化、ダヤク、マレー、社会変化、開発

1. 研究開始当初の背景

(1) 東南アジア諸社会では、大陸部、島嶼

部を通じて、山地に居住し焼畑耕作に従事する山地民と、平野部や大河川溪谷沿いに居住し水稲耕作を営む平地民との間の共棲的対立関係が社会的特質とされている。耕作様式ばかりでなく、村落の規模や人口の集中度などで平地民は山地民に比べて大規模で、今日でも東南アジア山地民は一般的に現代国家の中核から外れた「少数民族」であると認識されている。こうしたことから、山地民は現代国家にとって反政府的傾向を持つ、あるいは反政府にいたらないまでも、政治的に混乱をもたらすトラブルメーカーと認識される傾向にある。民族誌でも平地民に対して少数民族である山地民は、民族誌的に古い慣行を維持し、「伝統文化」を残す貴重な存在として記述されてきたと言える。

さらに、植民地時代以降、山地民は焼畑という「遅れた」耕作様式と首狩慣行などによって、「進んだ」平地民に対して古い生活様式を残した「遅れた」文化を持つものとして、新来の平地民に対して先住民である誤り考えられてきた。

(2) 本研究が対象とするボルネオでは、山地民はダヤク (Dayak) と総称され、海岸平地に住むマレー人と対比されてきた。植民地時代以降の研究では、ダヤクは新来のマレー人に先行する「先住民で」、新マレー人 (デュトロ・マレー) に対して原マレー人 (プロト・マレー) という呼称も用いられてきた。ボルネオに限らず、広く島嶼部東南アジアでは、山地民に対するプロト・マレー系という名称は現在でもしばしば使い続けられている。ボルネオではダヤクは山地斜面で焼畑耕作を行い、ロングハウスに居住、祖霊崇拜を維持する非イスラム教徒でかつては首狩慣行を持っていたとされている。これに対してマレー人は水稲耕作や商業交易、漁労に従事し、村落社会を構成、熱心なイスラム教徒である。各村落の中心にあるモスクはマレー人村落の象徴でもある。

(3) こうして対照的な生活様式を持つボルネオのダヤクとマレー人は、近年の研究では先住民と新来民、あるいは原マレー人と新マレー人といった遺伝的形質による対比ではなく、海岸平野と山地の自然環境に生態的に適応した生活様式の対比であると考えられてきている。つまり、これらは二つの異民族ではなく、概念的な対比であって、両者の実態は相互浸透的であると見なされてきている。概念的に対比されるゆえに、両者は一方で対立的であり、また他方では相互依存적でもあった。植民地時代以前は、両者は時には戦い合い、時には相互に利用しあう関係、つまり「共棲関係」にあった。

(4) 植民地時代はこの関係に大きな変化をもたらしたと考えられている。同じボルネオ島でもイギリス支配下にあった北部のサラワク、サバ (現マレーシア領サラワク州とサバ州) と南部3分の2を占める旧オランダ領 (現インドネシア領カリマンタン諸州) の相違は植民地行政の違いによる所が大きい。旧イギリス領のサラワク、サバではマレー人とダヤクは異なる民族として扱われ、ダヤクもいくつもの山地民族に分類された。これに対して旧オランダ領カリマンタン諸州ではオランダ植民地行政は内陸山地はほとんど及ばず、山地民はダヤクと総称されたまま「放置」されてきた。

(5) 太平洋戦争後のインドネシア独立と1963年のマレーシア成立もこの状況に大きな影響は与えなかったようである。しかしながら、植民地時代以降ボルネオ全土で近代都市の誕生、都市化と近代化、学校教育や商品経済浸透は着々と進み、ダヤクをめぐる社会的状況は徐々に変化してきた。プランテーションと胡椒やゴムなどの商品作物栽培の拡大は焼畑耕作技術と陸稲栽培を衰退させ、林業の拡大は焼畑耕作を圧迫した。また、学校教育が浸透するに従い、若年労力は有利な地位と収入を求めて都市部へ移動し、都市への人口集中とロングハウス生活の衰退をもたらしつつある。ひとことで言うなら山地の過疎化の進行である。

(6) こうした変化はボルネオ全土で1980年代から急速に進みつつある。都市の発展と人口集中、山地の過疎化が進む中では、かつての山地民と平地民の対比は意味をなさない。ダヤクとマレーの対比は希薄化され、従来の民族分類を無効にすると考えられる。

(7) こうした大きな社会変化の中で、ダヤクの概念と民族意識はどのように変化してきたか、あるいはどのような社会的意義も持つかについては未解明の部分が多い。マレー意識やマレー人の民族性についてはマレー人自身によるものを含め相当の研究が行われてきたが、ダヤクについては「伝統文化」の枠組みでの研究蓄積はあるものの、伝代社会でのダヤク民族意識についての研究はほとんどされてこなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は上述のような民族誌的背景と研究史上の背景をもとに、未解明のダヤク民族意識の現状と、現代社会におけるダヤク民族意識の意義を社会人類学的視点から調査研究し解明することを目的としている。

(2) ボルネオでは、しばしばダヤク、ないしはダヤク族と総称される山地民社会とマレー人と総称される平地民社会とは生業、社会組織、居住様式、宗教など、あらゆる点で対立しているように見え、研究者の間でも明確に対立する二つの民族であるかのように描かれる。しかし、上に述べたように、その実態は相互浸透的であり、平地民は交易などを通じ山地社会に溶け込み、山地民は山を下り平地社会に溶け込む(「マレーに入る(masok melayu)」、「海に行く」と表現される)というのが現実だった。二つの生活様式の社会は、互いに対立しつつも相互に依存し利用し合い、相互浸透的に融合しつつ複合的なボルネオ社会を構成していた。

国境がなかったボルネオ島は、19世紀半ば以降、オランダ領とイギリス領北ボルネオ(現マレーシア領サバ州)、イギリス人ブルック家三代が統治するサラワク(現マレーシア領サラワク州)とブルネイ王国の4つの領土に分割され、植民地独立後の国民国家の基礎となり今日に受け継がれている。大きな文化的違いがなかったと考えられるボルネオは、植民地行政とその後の独立国家の政治状況によって大きな違いを見せるようになった。山地民と平地民という基本的対立概念を残しつつも、それぞれの地域固有の変化を見せようとしている。簡潔に言うなら、マレーシア領では個別集団ごとの民族意識が高まり多民族化が進んでいるのに対して、インドネシア領では山地民ダヤクとしての民族意識を強めている。2001年2月から5月にかけて中部カリマンタン州で起きた大規模な「民族暴動」は、残虐な首狩慣行の復活として世界を震撼させたが、同様な民族対立がマレーシア領で起きるとは考え難い。山地民と平地民の関係と民族意識に大きな違いがあるからである。本研究ではそれぞれの地域でのダヤク諸族と平地民の民族誌を検討し、それぞれの民族意識の現状と現代社会における意義を社会人類学的観点から比較考察する。

(3) こうした地域的な相違が、旧宗主国の関心や植民地行政とその後の独立国家の在り方、経済状況や行政上の相違によるものであることは間違いない所だが、では、ダヤク民族意識は具体的にどのような相違があり、どのような要因によって相違が生まれたのか。東南アジアでは民族問題は社会的、政治的問題として、人類学の分野ばかりでなく、多くの研究者とマスメディアの関心を集めている。特に山地民については少数民族の権利や政治的自立性の主張といった、平地民主導の国家政治に対する反抗的側面が注目を浴びる。しかし、こうした山地民観は植民地期にもたらされた西欧的民族観にもとづくものだった。サラワク民族誌研究でも明らか

なように、今日の民族問題で議論されるような明確な民族意識、言語と慣習、帰属意識を共有するような民族意識は、サラワク山地民にはなかった。多くの山地民は二語、三語を併用し、通婚、商取引などを通じて常に帰属は変化していた。植民地時代以降この状況は徐々に変化し、サラワクでは小民族集団として、カリマンタンではダヤクとして民族意識確立に向かっているようである。

しかしながら、こうした民族意識確立の過程については、これまでの研究からはダヤク自身もほとんど自覚していないものと考えている。したがって、本研究では植民地時代に端を発し、独立後から今日に至る歴史的過程の中でダヤク民族意識がどのように醸成され確立されてきたかを具体的に分析解明することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 本研究は平成22年度から24年度にかけて行われたものだが、研究目的そのものに直接かかわる文献資料はきわめて少なく、社会人類学的研究方法に従って長期に現地に滞在し、地域住民に直接聞き取り調査を行う方法を主とする。具体的にはダヤク系諸団体関係者や教会関係者の村落リーダーなどであるが、民族意識の現状を探る上では一般住民からの聞き取りも重要である。したがって経費の大部分は現地調査旅費が占めている。

(2) 一方、本研究にかかわる既存の文献資料は、植民地時代の行政記録やガゼット・新聞など、さらにダヤク系諸団体による活動記録や広報活動記録など、またキリスト教各教派による布教活動記録や広報資料などである。こうした資料は研究目的の文献と異なり、大部分は日常的話題や広報目的のもので、そうした文献から重要情報を引き出すには注意深い分析と時間と手間が必要となる。

(3) また、現地研究者との情報交換はきわめて重要である。本研究が対象とするボルネオには、マレーシア側ではサラワク・マレーシア大学、サバ・マレーシア大学、サラワク博物館、サバ博物館などがあり、インドネシア側では州ごとの国立大学の他、西カリマンタンと中部カリマンタンにはダヤク文化研究機関があり、それぞれダヤク研究を活発に進めている。こうした現地研究者の多くは自身がダヤク出身であり、自身の民族意識やダヤク意識の在り方についても外部研究者と異なる見解を持つことが期待される。さらに、現地状況に精通することから、研究者との情報交換を通してしか得られない貴重な情報が得られるととが期待出来る。

4. 研究成果

(1) 平成22年度はマレーシア領サラワク州とインドネシア領西カリマンタン州を現地調査の対象とし、旧イギリス領であるマレーシア側と旧オランダ領であるカリマンタン側の比較検討と西カリマンタン州の民族状況一般についての民族誌方法収集を目的に現地調査を実施した。現地聞き取り調査とともに、マレーシア国立大学、サラワク博物館、サラワク・マレーシア大学東アジア研究所や西カリマンタン州タンジュンプラ大学、ダヤク文化研究所などで基礎資料を収集するとともに現地研究者と情報を交換することが出来た。

平成23年度はマレーシア領サラワク州とサバ州を現地調査の対象とし、マレーシア国立大学、サラワク博物館、サラワク・マレーシア大学東アジア研究所、サバ・マレーシア大学、サバ博物館などで現地研究者と情報交換を行った。

平成24年度は調査機関が短く補足的な意味合いが強かったが、サラワク州北部を中心に現地調査を行い、諸研究機関で情報交換を行った。

研究成果の中では以下のようないくつかの重要な点を指摘することが出来る。

(2) ボルネオ島民族誌の中ではもっとも多くの情報があり、民族誌記録が多いのはマレーシア領サラワク州に関するものである。ボルネオ民族誌の概要はサラワク民族誌による所が大きい。本研究当初の背景や研究目的の中で述べたように、ボルネオでは山地民はダヤク、これに対比される平地民はマレーと記述されることが多い。山地民と平地民が概念的に対比される、生活様式である点は東南アジアの他の地域と同様にボルネオ全土に共通するものであると考えられる。

西カリマンタンでの現地調査では、こうした通年に反して、平地民はマレーとは限られず、出身伝承によりさまざまな民族名が認識されている。マレー概念は隣接するサラワクから伝播したものと考えてよく、ブギス、マドゥラ、ジャワなど多様な呼称が使われている。ただ、多くの人々は自信の民族帰属を一義的に定義するわけではなく、ブギスだがマレーだというように曖昧に定義している。

これに対して、山地民はすべてダヤクであると意識している。西カリマンタン山地部には言語慣習を異にする100以上のダヤク系諸集団が居住し、そうした各集団(民族集団?)の調査研究はダヤク系団体自身の手で進められている。互いに言語が通じないダヤク出身者が都市化と現代インドネシア学校制度の浸透によって都市部へ移住、結婚が都市部に永住する事例は数多い。すなわち、もはや山地民ではなく平地民なのである。しかし、

彼らの民族意識は聞き取り調査では例外なく「ダヤク」であり、互いの母語が通じない場合は家庭内の日常会話ではインドネシア語が使われる。この傾向は、スハルト政権崩壊後の地方分権化の中で急激に信仰したと想定しているが、すでに次の世代が成長し、彼らはインドネシア語しか理解出来ない。こうした子供たちも、民族意識という点ではダヤクである。ダヤクの言語を理解しないダヤクは今後ますます増加するものと思われる。カリマンタン州知事はダヤク出身であり、ダヤク系団体は地方政治で大きな役割を果たしている。

こうしたことから言えることは、ダヤクという実態が失われる中で、これと裏腹に民族意識は強まり、カリマンタン諸州の地方政治の中で重要な機能を果たしつつあり、この傾向は強まるであろうということである。

(3) マレーシア領サバ州でもよく似た状況が見られた。サラワクと同じく旧イギリス植民地であり、ともにマレーシアの一員であるにもかかわらず、サラワクと異なり元来マレー概念はほとんど使われないように見られる。在来の人々がサラワクのマレー概念に近い使い方をするのはむしろ「ブルネイ」である。山が海岸に迫り平地民概念が希薄であるとも見られるが、ダヤク概念も希薄である。山地民はムルト、ルングス、ビサヤなど個別の民族集団名が使われることが多い。つまり、民族意識はダヤクである前に、ムルト、ルングス、ビサヤなどであり、マレーであるより隣接するブルネイとのかかわりで意識されている。

ボルネオではマレー、ないしはマレー人という概念は、植民地時代の初期、19世紀半ば頃にマレー半島、シンガポールからイギリス人が持ち込んだ概念であるとの見解が一部の研究者の間にあるが、カリマンタンやサバでの調査結果はこうした見解を裏付けていると見る事が出来る。これに対して、ダヤク概念は古く、原オーストロネシア語にまで遡れる可能性がある概念であり、元来は山の方位を表している。こうした方位概念がどのような背景の中で、どのような過程で民族名称として扱われるようになり、さらに民族意識を形成するに至ったのだろうか。マレー概念の成立については、そのもととなったマレー半島でのマレー概念成立過程との比較研究が是非とも必要であろう。

(4) ダヤク概念は広くボルネオ全土で使われているとは言え、民族意識とのかかわりや用法には相当の地域差があり、そうした地域差は現代ボルネオ社会の地方政治の在り方と密接に関わっているように見える。

カリマンタンではダヤクであることは地方政治過程でのリーダーシップの形成と重

要なかかわりがあるようである。同じことは、ダヤクよりもイバン、ビダユなどダヤク系民族集団の分化が顕著なサラワクでも言える。北部サラワクでは山地少数民族の総称である「オラン・ウル」があたかも民族集団名であるかのように扱われ、事実自身の帰属を「オラン・ウル」であるとする人々も多い。そして「オラン・ウル」団体はサラワク州政治の中で重要な役割を果たしている。

(5) では、こうした民族集団形成の契機となったものは何だろうか。

山地民と平地民は実態よりも概念的に対比されていたもので、両者の生態は連続的である。マレーシアではマレー人とはイスラム教徒でイスラムを放棄すればマレー人ではない。またイスラムに入信することはマレー人になることでもある。しかし、カリマンタンではイスラム教徒のダヤクも存在する。カリマンタンの地形は、海岸近くの低湿地から主な交通路である河川を遡り内陸部に至るが、蛇行を繰り返す河川は緩慢に高度を高くする丘陵部を延々と流れて山地に達する。低平地と山地に顕著な景観上の相違があるわけではない。河川後背湿地ではサゴヤシが生育し、天水田が広がる。丘陵斜面では水田の脇に焼畑の内が広がることも珍しくない。つまり、概念的に対立するとは言え、自然環境も人々の平地民／山地民意識も連続的なものだった。

植民地時代を迎える前のこうした民族誌的状况に断絶をもたらしたものはいうまでもなく植民地支配だが、マレー＝イスラムとの対比の中で、キリスト教会活動が与えた影響は重要なものだったようである。これら教会活動がボルネオ民族意識に具体的にどのような影響を与えてきたか、布教の民族誌が次の課題であると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

石井眞夫、ボルネオ・ダイヤキズムと山地民の生態、人文論叢、査読無し、第29号、2012、pp. 13-25

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 眞夫 (ISHII MASAO)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号： 20136576

